



# 迷子(不見／The Missing)

2007(平成19)年2月4日鑑賞(シネ・ヌーヴォ)

監督・脚本=李康生<sup>リー・カンション</sup>／出演=陸弈靜<sup>ルイーイーチン</sup>／張捷<sup>チヤンチエ</sup>／苗天<sup>ミョウティエン</sup>(プレノンアッシュ配給／2003年台湾映画／88分)

……すべての蔡明亮<sup>ツァイ・ミンリヤン</sup>監督作品で主演を演じてきた李康生<sup>リー・カンション</sup>が、『楽日』での出演シーンを極力減らして挑んだのが監督業！ その監督初作品は、孫を公園で迷子にさせてしまったおばあさんの物語と、インターネットカフェに入り浸り、おじいさんを死なせてしまった中学生の物語。何の脈絡もない2つの物語が行き着くところで、李康生監督が訴えるテーマとは……？ 安物ドラマでは決して表現できない本物の喪失感や失われた絆が浮かび上がってくるが、それってホントはかなり恐いもの……？ 李康生監督の第2作にも要注目だ。

## 李康生<sup>リー・カンション</sup>初の監督作品がこれ！

蔡明亮<sup>ツァイ・ミンリヤン</sup>監督作品のすべてに主演してきた李康生<sup>リー・カンション</sup>は、1968年生まれだから、1957年生まれの蔡明亮<sup>ツァイ・ミンリヤン</sup>監督の一世代下。1991年の『小孩』から約15年間蔡明亮<sup>ツァイ・ミンリヤン</sup>監督を師匠としたコラボレーションを続けてきたそんな李康生<sup>リー・カンション</sup>が監督に初挑戦したのがこの『迷子』。

「特集蔡明亮<sup>ツァイ・ミンリヤン</sup>と李康生<sup>リー・カンション</sup>の《連弾》」として『西瓜』『楽日』『迷子』を特集した『キネマ旬報』2006年8月上旬号によれば、彼は「いまは、監督をしたいという気持ち強い」と述べている。また、彼のオリジナル脚本による長編2作目が2006年9月にクランクインする予定とのことだから、いずれ日本でも公開されるだろう。15年間も一緒に仕事を続けていれば師匠の影響を受けるのは当然で、蔡明亮<sup>ツァイ・ミンリヤン</sup>監督作品である『西瓜』『楽日』と同じように、この『迷子』もセリフがきわめて少ないのが1つの特徴。そして、とことん突き詰めたテーマの設定はまさに師匠譲り……？ 物

語は、公園で大切な孫を迷子にさせてしまった陸<sup>ルー・イーチン</sup>奔静扮する祖母が、必死になって孫を捜し回る長回しシーンから始まるが、さてこの映画のテーマは……？

## 冒頭、約10分間のシーンは……？

映画づくりやカメラ回しのテクニックは奥が深いから、勉強すればするほど面白いのは当然。この映画の冒頭に登場する、祖母が迷子になった孫を捜して約10分間公園内を歩き回るシーンは、エキストラを誰1人使わず、ホンモノの公園内を陸<sup>ルー・イーチン</sup>奔静1人が「孫を見失った気持になって動いた」だけ……。つまり、公園の一番高い丘の上にカメラを設置して、1時間か2時間ぐらいそのままとし、カメラが公園の風景に溶け込んで、誰もカメラに注意を向けなくなったところで撮影をスタートさせたわけだ。そして、最初のテイクは技術的な問題ですぐに中断してしまったものの、次のテイクでうまくいったので、結局この冒頭約10分のシーンは2テイクだけで撮り終えたとのこと。パンフレットにあるそんな李<sup>リー・カンション</sup>康生監督のインタビューを読むと、撮影の手法にも興味が湧いてくるというもの。なるほど、そういうことなら、この私だって……？

## 一方で全く別のストーリーが

祖母が孫を捜し回るストーリーとは全く別に、中学生くらいの少年（張<sup>チヤン・チエア</sup>捷）が登場する。彼はどうも朝寝坊したようで、おじいさん（苗<sup>ミヤオ・ティエン</sup>天）からの「伝染病（SARS）が発生したから用心を」と書かれた新聞記事を切りとって示すという奇妙な伝言を見ながら、1人家を出ていくことに……。ところが、彼はどうも真面目に学校に行くのではなさそう。そして、おじいさんがつくってくれた弁当を公園の木に引っかけたまま、インターネットカフェに入り浸り、ゲームに熱中している様子。本来若者でいっぱいのはずのこの少年の隣には、中年のおじさんが机に足を投げ出して眠っているが、彼はどうもここで夜を明かしたらしく、便所でちゃんと歯磨きをしたり、通路では太極拳めいた体操をしたり……。隣同士に座ったこの2人は、一緒にカップラーメンをすすったりというコミュニケーションも少しは生まれたようだが、胸の痛みを覚えたおじさんが外で倒れても、少年は全く無関心。一体この少年は何をやっているの……？

## 三世代同居？ 両親不在？

この映画は難解で、さまざまな解釈が可能だが、パンフレットにある大場正明氏（映画評論家）の「喪失感を抱えた時代」という解説は興味深い。そこでは、中国や台湾では三世代同居というスタイルが多いが、実は両親は外での仕事が忙しく、子供と接する時間が短いため、どうしても祖父母と孫との接触が濃くなるということが述べられている。たしかにそう言われてみると、祖母は孫の両親に連絡をとろうとするが、それができず泣き崩れるばかりだし、中学生の方は、なぜか「認知症」に陥っているおじいさんとの2人暮らしで、両親の姿は全く見えない。

また、日本人以上に血縁関係や先祖との結びつきに重きを置く中国や台湾らしいシーンは、孫を捜しあぐねた祖母が亡き夫に救いを求めるため、そのお墓に行き、グチったり紙のお札を燃やしたりする行動。セリフ無しで展開されるこれらの行動を、あなたはどうか感じとる……？ そして李康生監督の狙いは……？

## 2つのストーリーの接点は……？

公園は広いから、祖母が捜し回るには大変。さらに公園内から捜す範囲を広げれば、自分の足だけでは到底ムリだから、祖母はバイクに乗る若者に無理やり頼み込むという厚かましさを発揮しながら捜し回るが、さて孫の発見は……？

他方、ずっと入り浸っていたインターネットカフェから出てやっと家に戻ってきた中学生は、おじいさんがいなくなっていることに気づき、急いで公園へ……。そんな公園の中で、全く関係のない祖母と中学生が出会いそうになるが、たとえ出会ったとしても、それは出会いではなく単なるすれ違い……？ ちなみにそれは、日本で近時大はやりの「出会い系サイト」による「出会い」も全く同じ……？

李康生が初監督したこの映画は、もちろん何らかの結論を示したものではない。しかして観客が感じるの、とめどもない孤独と喪失感……。したがって、88分の映画ながら、観終わった後グッタリ疲れることはまちがいない……。

2007(平成19)年2月7日記